

7月16日 AM5:30 JR 穂高駅前に総勢15名が集合。貸切バスで中房温泉・燕岳登山口へ向かい、小1時間で到着。準備を整え AM7:00 登山口を出発する。天候は晴。林の中の蒸し暑い急坂を、第一ベンチ、第二ベンチと休憩をしながら登る。3時間程で合戦小屋に到着。



林の中の急坂を登る



ゴゼンタチバナ



シナノキンバイ



夏雲湧く尾根

合戦小屋で小休止後、低木帯を抜け、夏雲が湧く尾根道に登り出る。PM12:00 燕山荘に到着する。主稜線に建つ山荘からの展望は一変し、稜線の信州側は雲が沸き立ち、その反対側は青空の下、天を衝く槍ヶ岳が北アルプスの聖者のように、颯爽と聳え立っている。暑い陽射しと今日の行程を考え、燕岳への登頂を諦め、昼食後先を急ぐ事とする。



夏雲湧く燕岳 2704m



稜線の先に目指す槍ヶ岳 3180mが聳え立つ



チングルマ



コマクサ

PM1:00 燕山荘を出発。槍ヶ岳を前方に望み、緑のハイマツと花崗岩石が林立する稜線を進む。白砂礫の斜面には、薄紅色のコマクサが今を盛りと群落している。PM3:30 喜作レリーフ地点を通過、大天井岳への分岐を左に見て、ガレた岩場をトラバースして降下すると、PM5:00 大天井ヒュッテに到着、泊す。

7月17日、快晴。AM6:30 大天井ヒュッテを出発。振り返る後方に大天井岳、その左に針ノ木岳、立山、剣岳そして裏銀の山々が連なる。歩く稜線には、ハクサンイチゲ、シナノキンバイの花々が群落してみずみずしく咲き競う。登る右前面には北鎌、東鎌尾根の切り立った岩稜線の頂点に、槍ヶ岳が雄々しく聳えている。AM9:00 西岳ヒュッテに到着。ここで小休止して、このコース最大の難所に備える。



大天井岳を背景に稜線を行く



西岳から望む槍ヶ岳



西岳じから水俣乗越へ下降



西岳ヒュッテから、急斜面を慎重に下降し、最低鞍部の水俣乗越に1時間程で到着。ここから東鎌尾根の痩せた岩尾根に取り付く。尾根には、要所にハシゴ、クサリ整備がされ、それらを使用し、一步、一步高度をかせぐ。北側眼下には、高瀬川源流天上沢が流れ、南には、穂高岳連峰が連なり、中岳、大喰岳から流れ落ちる溪流が槍沢となって遥か眼下へ流れ下っている。



天井沢を眼下に東鎌尾根を登る



登る前方に槍ヶ岳が迫る



岩稜線を登る

PM12:30 岩稜に建つ大槍ヒュッテに到着、30分ほど休憩して昼食を摂る。ここから岩稜線を登り続ける。登るにつれ、見上げる槍ヶ岳の大岩峰が、徐々に迫ってくる。PM2:15 槍ヶ岳山荘に到着、早速、山荘に荷を置いて、霧が舞い始めた山頂目指して出発する。

槍穂先の高さ100mの岩場に取り付き、渋滞する登山者の列に従い、徐々に高度を上げていく。必死に登攀する絶壁の岩陰に、ミヤマダイコウソウ、ハクサンイチゲの花々が、微風に揺れて咲いている。最後の10mの鉄ハシゴを登り切ると、PM4:00 とうとう憧れの槍ヶ岳山頂3180mに登頂する。「ヤッター!、おめでとう」。喜びの握手を交わし、お互いを称え合う。あいにく山頂は霧に覆われ、展望がほとんど効かない。20分程で下山を始め、慎重に岩場を下降し、山荘に無事帰還、泊する。



槍肩からの槍ヶ岳3180mの岩峰



穂先の登攀



槍ヶ岳山頂3180mに見事登頂

7月18日朝焼けの朝、AM6:15 山荘を出発。上空は高曇り、飛騨乗越に下り、槍平への分岐を右に見て、主稜線を30分程登ると大喰岳3101mへ到着する。山頂からは360°の大展望。北方には、立山、白馬、南に穂高岳、その後方に乗鞍、御岳山が望まれる。東方向に常念、浅間山の峰々が重なるように連なり、遠く八ヶ岳、富士山が遠望できる。



朝焼けの朝を迎える



朝陽を浴びる笠ヶ岳2898m



槍ヶ岳を背景に3000m稜線を縦走する



タカネヤハコ



ミヤマダイコンソウ



ミヤマオダマキ



ハクサンイチゲ

歩く稜線には、ヨツバシオガマ、タカネヤハズハハコの花々が満開に咲いている。浮石を注意して岩峰を 20 分程登り詰めると、AM7:30 中岳の山頂 3084m に登頂する。振り返ると、三角推形状をした槍ヶ岳が美しい



中岳山頂 3084m から望む、三角推形状の美しい槍ヶ岳の姿



縦走路東方向に、常念岳 2087m、遠く浅間山を望む

中岳からは岩稜線を下り、分岐点から天狗原氷河公園へ向かって痩せ尾根を下降する。AM10:00 雪に埋まる氷河公園で小休止後槍沢を下る。PM12:30 槍沢ロッジに到着、ここで昼食を摂る。PM1:00 出発、横尾を経て上高地に PM5:00 到着。3 台のタクシーに相乗りし、PM6:30 松本で解散とした。

「青空の下、絶景の表銀座を歩き、そして憧れの槍ヶ岳 3180m 登頂。さらに、花々が咲き競う 3000m の岩稜線を緊張して縦走した山の経験は、忘れられない貴重な思い出となった事でしょう。」